授業科目	日本語教育方法論演習Ⅱ					実務家教員担当科目	-
単位	2.	履修	選択	開講年次	2	開講時期	後期
担当教員	矢野　花織						
授業概要	学生が互いに教師役、学習者役に分かれて模擬授業（マイクロ・ティーチング）を行う。教師役は学習者、学習レベル、学習時間などに考慮して教案及び補助教材を作成し、特定の学習項目を教える。学習者役は学習者になりきって模擬授業を受けることで、学習者の心理を擬似体験する。それぞれの立場から模擬授業を評価し合うことで学びを深めていき、来年度の教育実習に備える。 また同時に、多様化する日本語教育の分野において、日本語教育に関わる専門職、日本語学習者について現状を知り、具体的なイメージを膨らませると同時に、日本語教育のキャリアについて考えるきっかけとする。						
授業形態	講義・演習			授業方法			

学生が達成すべき行動目標	
標準的レベル	1. 日本語教育の実践場面のイメージを描けるようになる 2. 教案を作成し、実際に授業をすることができる。 3. 授業を客観的かつ多角的に観察・分析することができる。
理想的レベル	日本語学習者（初級レベル）に対してティーチャートークや図解などを効果的に用いながら、日本語指導ができる。

評価方法・評価割合

評価方法	評価割合（数値）	備考
試験	30%	
小テスト		
レポート		
発表（口頭、プレゼンテーション）	30%	
レポート外の提出物	20%	
その他	20%	授業への積極的態度

カリキュラムマップ（該当 DP）・ナンバリング

DP1	-	DP2	-	DP3	○	DP4	○	DP5	-	ナンバリング	-

学習課題（予習・復習）	1 回の学習目安（時間）
与えられた課題のほか、授業に関連する事柄について自ら予習・復習を行う	4

授業計画

第 1 回	オリエンテーション 授業の概要を説明し、履修方法や授業の目的、達成目安、評価の内容と方法を理解する。
第 2 回	日本語の教え方（復習） 日本語教育方法論演習Ⅰで学んだことを振り返り、その知識を実践につなげるためのアウトプットを行う。 また、学習支援のスキルを高めるためのグループワークを行う。

第 3 回	外国語教授法① オーディオリンガル法とコミュニカティブ・アプローチの比較をしながら教授法について知る。 また、学習支援のスキルを高めるためのグループワークを行う。
第 4 回	外国語教授法② 教授法の流れを社会的背景や関連理論と合わせて学び、さまざまな教授法を知ることで外国語教育に対する理解を深める。 また、学習支援のスキルを高めるためのグループワークを行う。
第 5 回	コースデザインとシラバスデザイン 留学生、生活者としての外国人、就労者、児童生徒等、多様化する学習者（潜在的学習者）の現状について理解を深め、そのニーズ・レディネスに応じた日本語教育について考える。
第 6 回	学習レベルと教材・教具の工夫 CEFR を参考に作成された「日本語教育の参照枠」を理解する。 レベル、必要な言語活動や言語使用目的にあわせた授業を考え、レアリアやアクティビティなどについて話し合う。 文型ベース、タスクベースの教案を見ながらグループで話し合い、授業の流れをイメージする。
第 7 回	言語や文化に関する知識【オンデマンド】 日本語の構造に関するトピックの中から、関心のあるテーマを各自ひとつ選択し、動画（第 6 回目の授業で提示する）を視聴する。 必要に応じて他の書籍も参考にしながら理解を深め、それぞれが学んだことについてレジュメを作成して発表の準備をする。
第 8 回	教育実践のための技能 それぞれが選択した日本語の構造に関するテーマについて、作成したレジュメを使って発表を行う。 発表者は「教師という立場で人前で話す」「自分の持つ知識を分かりやすく説明する」という体験をする。 また、発表者を含む受講者全員が、日本語の構造に関する知識を定着させていくと同時に、 教育現場で実践するための技能について、議論・質疑を行ないながら理解を深める。
第 9 回	教材研究と教案作成【オンデマンド】 文化庁や国際交流基金などの動画教材を視聴する。 動画教材を用いた授業における「文型の導入」「ドリル」「アクティビティ」を考えて教案を書き、次回の模擬授業の準備・練習を行う。
第 10 回	マイクロ・ティーチング（練習） 授業担当者が、他の学生を相手に少人数・短時間で模擬授業をする。 授業後、コメントを出し合うフィードバック・セッションを行う。
第 11 回	前回のふりかえりと授業改善 模擬授業の自己評価・相互評価によるふりかえりを行い、 2 回目のマイクロ・ティーチングに向けた授業改善を目指して、日本語指導用のより具体的な教案・教材作成をする。

第 12 回	マイクロ・ティーチング（前半） 授業担当者（グループ１）が、それぞれが作成した教案に沿って模擬授業を行う。 学習者役の学生（グループ２）は、学習者のミステイクとエラーを意識しながら学習者役になりきる。 終了後は、自己評価・相互評価を行う。
第 13 回	マイクロ・ティーチング（後半） 授業担当者（グループ２）が、それぞれが作成した教案に沿って模擬授業を行う。 学習者役の学生（グループ１）は、学習者のミステイクとエラーを意識しながら学習者役になりきる。 終了後は、自己評価・相互評価を行う。
第 14 回	日本語教育のキャリア 日本語教育の専門職としての進路や、日本語教育の知識や技術を生かした活動機会について考え、それぞれの将来につながる選択肢のイメージを広げる。
第 15 回	まとめ 後期で学んだことの振り返りを行い、次年度の教育実習に向けた新たな気づきを得る。
テキスト	森篤嗣(2022)『超基礎日本語教育』くろしお出版
参考図書・教材／データベース・雑誌等の紹介	スリーエーネットワーク(2012)『みんなの日本語初級Ⅰ第２版 本冊』スリーエーネットワーク スリーエーネットワーク(1998)『みんなの日本語初級 Ⅰ 翻訳・文法解説英語版』スリーエーネットワーク スリーエーネットワーク(2016)『みんなの日本語初級Ⅰ第２版教え方の手引き』スリーエーネットワーク 小林ミナ(2019)『日本語教育よくわかる教授法』アルク 鎌田修，川口義一，鈴木睦編著(2006)『日本語教授法ワークショップ DVD』凡人社
課題に対するフィードバックの方法	随時ふりかえりの時間を設けるほか、必要に応じて個別フィードバックを行います。
学生へのメッセージ・コメント	1. 今までに学んだ日本語教育に関する知識を実際に運用してみる授業です。 2. 授業を通して、日本語を教えることはもちろん、日本語教育・教師・学習者に関する気づきを深め、日本語教育専門職という視点から多文化共生につながる理解を深めてほしいと思います。